

## 利尻島におけるシギ・チドリ類の渡来状況

小杉和樹

日本野鳥の会道北支部会員  
(〒097-04 利尻町沓形字富士見町)

The Migration of Waders from Rishiri  
Island, Northern Hokkaido

By

Kazuki KOSUGI

Fujimi-cho, Kutsugata, Rishiri, Hokkaido, 097-04 Japan

### はじめに

利尻島の地理的な特徴として、発達した湿地や干潟、砂浜といった環境が少ないことが挙げられる。他地域では、春秋にこのような環境へ多くのシギ・チドリ類が渡来することが知られているが、この環境が少ない利尻島では、海岸域にそれらの種が渡来する。これらの観察状況については「利尻島の鳥」（小杉1988）、「オタドリ沼の鳥」（小杉1989）で報告しているが、本稿ではその後記録された種と春季の記録を追加して、本島におけるシギ・チドリ類の渡来状況について述べる。

### 調査地及び調査期間

調査地は、本島の海岸線全域と湿地及び本島南部にある湖沼地帯である。

海岸線は延長63.3kmあり、その大部分は本島を環状する道路と近接して、北東部～西部・南部～南東部にかけて岩礁浜、西部～南部・北東部～南東部にかけては転石浜を中心に形成され、小規模な砂浜が南東部沼浦地区と北西部本泊地区にみられる（小杉1990）。

湿地は通常草地と同様な環境にあるが、融雪水や豪雨によって一時的な小規模の湿地的環境になるものである。主に北部の富士岬地区と西部の新湊地区に春と秋に形成される。

湖沼地帯はオタドリ沼とメヌシヨロ沼で、どちらも水深は浅く、岸にはキタヨシが密生している（1989）。ほとんどの岸は水面と段差がついており、緩やかな勾配で岸になっている箇所はごく

一部である。

調査は1987年から1991年までの5年間で、他の鳥類の観察と兼ねて行った。

### 結果及び考察

#### 1. 渡来種について

1987年から1991年までに利尻島で観察されたシギ・チドリ類は26種である（Table 1）。このうち繁殖が確認されている種はオオジシギ1種だけであるが、観察の状況からみてヤマシギと、夏季に継続して観察されているイソシギは繁殖している可能性がある。上記3種以外の23種は旅鳥であり、このうち普通に観察されたのは、メダイチドリ、トウネン、キアシシギ、クサシギ、タカブシギである。この5種については、5年間の月毎と全体の観察回数による出現頻度をTable 2に示した。なお、5年間にシギ・チドリ類を観察した回数は79回であり、月別では次のとおりである。（オオジシギ、ヤマシギ、イソシギは除く）

4月：5回、5月：27回、6月：0回

7月：4回、8月：19回、9月：20回、10月：4回。

一年を通してキアシシギの出現頻度が最も高く、次にタカブシギとなっているが、タカブシギでは春にその出現頻度が高い。そして、クサシギでは秋に高くなっている。観察が1例（同一個体が2日以上連続して観察された場合も含む）しかないのは、シロチドリ、ムナグロ、アメリカウズラシギ、コオバシギ、ハマシギ、オバシギ、ミユビシギ、コアオアシシギ、オオソリハシシギ、ツバ

表1 利尻島において観察されたシギ・チドリ類

Table 1. Waders observed from Rishiri Island

種 Species	学名 Scientific name	観 察 月										環境* Habitat
		Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov		
コチドリ	Charadrius dubius						○					L
シロチドリ	C. alexandrinus		○									S
メダチドリ	C. mongolus			○		○	○	○				S.L
ムナグロ	Pluvialis dominica							○				S
タケリ	Vanellus vanellus	○								○		G
キョウシヨシギ	Arenaria interpres											S
トウネン	Calidris ruficollis		○	○			○	○				S.L
アメリカカウズラシギ	C. melanotos									○		S
ハマシギ	C. alpina							○				S
コオハシギ	C. canutus							○				S
オハシギ	C. tenuirostris						○					S
ミユビシギ	Crocethia alba							○				S
コアオアシギ	Tringa stagnatilis			○								Sw
アオアシギ	T. nebularia						○	○				L
クサシギ	T. ochropus			○				○	○			L.Sw
タカアシギ	T. glareola		○	○		○	○					S.L.Sw
キアシギ	T. brevipes			○		○	○	○	○			S.L.Sw
イソシギ	T. hypoleucos			○	○	○	○	○				S.L
ソリハシギ	Xenus cinereus						○					S
オオソリハシギ	Limosa lapponica						○					S
チュウシャクシギ	Numenius phaeopus			○				○				S
ヤマシギ	Scolopax rusticola							○	○			O
タシギ	Gallinago gallinago									○		G
オオシギ	G. hardwickii		○	○	○		○					G.L
セイタカシギ	Himantopus himantopus			○								S
アカエリヒレアシギ	Phalaropus lobatus			○			○	○	○			S.L
ツバメチドリ	Glareola maldivarum		○									O
月別観察種数	No. of species	1	5	11	2	4	12	13	5	2		

\* 環境 Habitat S=海岸 Seashore L=湖岸 Lake shore Sw=湿地 Swamp G=草地 Grassland  
O=その他 Others

表2. 利尻島における1987-1991年の普通旅鳥5種の出現頻度(%)

Table 2. Occurrence frequency(%) of birds for esch common Transient of the Rishiri Island from 1987 to 1991 inclusive.

種 Species	学名 Scientific name	観 察 月								計 Totale
		Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct		
メダイチドリ	Charadrius mongolus	0	3.8	0	50.0	26.3	35.0	0	19.0	
トウネン	Calidris ruficollis	0	7.4	0	0	42.1	30.0	0	20.3	
クサシギ	Tringa ochropus	0	11.1	0	0	5.3	5.0	50.0	8.9	
タカアシギ	T. glareola	20.0	33.3	0	0	42.1	10.0	0	25.3	
キアシシギ	T. brevipes	0	7.4	0	50.0	63.2	55.0	25.0	35.4	

メチドリの10種であり、利尻島においては稀な渡来である。この他の8種は毎年観察されたが、観察例は少ない。

以下にそれぞれの渡来状況を述べる。

コチドリ

1988年8月12日～14日に、オタドリ沼の砂が堆積した岸で1羽が観察された。

シロチドリ

1987年4月13日に、沓形岬公園の海岸の岩礁で1羽が観察された。

メダイチドリ

春と秋、定期的に海岸の岩礁や砂浜に渡来し、その期間は長い。一地区における最大個体数は5羽であった。

ムナグロ

1987年9月20日～26日に、鴛泊字本泊の海藻が打ち上げられた岸で2羽が観察された。

タゲリ

1991年3月31日に、仙法志字政治の草原と同年(1991年)11月2日に、鬼脇の中学校校庭で1羽が観察された。

トウネン

春と秋、定期的に海岸や湖沼地帯の岸に渡来する種で観察回数は多い。一地区の最大観察個体数は12羽であった。

アメリカウズラシギ

1988年10月2日に、鴛泊字本泊の海藻が打ち上げられた岸で2羽が観察された。

ハマシギ

1987年9月19日に、鴛泊字本泊の海岸の塩溜りで1羽が観察された。

コオバシギ

1987年9月2日に、沓形岬公園の岩礁で1羽が観察された。

オバシギ

1987年8月21・22日に沓形岬公園の海岸の岩礁で若鳥1羽が観察された。

ミュビシギ

1990年9月9日に、仙法志字元村の海藻が打ち上げられた海岸で1羽が観察された。

コアオアシシギ

1988年5月7日に、鴛泊字富士岬の一時的な湿地で1羽が観察された。

アオアシシギ

1988年9月11日に、オタドリ沼の岸で1羽、翌年(1989年)8月13日にも同所で1羽が観察された。

クサシギ

主に秋の9月～10月に渡来する。湖沼地帯の岸で観察されることが多く、一地区の観察最大個体数は9羽であった。春は極度に少ない。

タカブシギ

毎年春と秋に定期的に渡来し、観察される環境も海岸・草原・湖沼地帯と様々である。観察回数も多く、一地区の観察最大個体数は15羽であった。

## キアシシギ

毎年春と秋に定期的に渡来し、最も渡来が多い種である。観察期間も、5月～10月までに6月だけが観察されないだけの長い種である。海岸、湖沼地帯、河川で観察された。

## イソシギ

これまでに5月～9月までの間、継続して観察された種である。海岸、湖沼地帯の岸で観察された。

## ソリハシシギ

1988年8月9日～10日に、オタドリ沼の岸で2羽と、1990年8月12日杳形岬公園の海岸の岩礁で2羽が観察された。

## オオソリハシシギ

1990年9月9日～10日に、仙法志字元村の海藻が打ち上げられた岸で1羽が観察された。

## チョウシャクシギ

1990年5月25日に仙法志字本町の海岸の岩礁で17羽が観察された。翌年(1991年)9月7日には、杳形字新湊の海岸で1羽が鳴きながら飛ぶのが観察された。

## ヤマシギ

1991年10月1日に、鬼脇字沼浦で交通事故にあって死亡したと思われる個体があった。

## タシギ

1991年11月9日に、鴛泊中学校校庭で1羽が観察された。

## オオジンシギ

毎年4月～8月まで観察され、5月頃まではディスプレイフライトが頻繁に見られるが、その後は湖沼地帯のヨシ原から飛び出すのが観察される。

## セイトカシギ

1990年5月12日に、鴛泊字湾内の海藻が打ち上げられた岸で1羽が観察された。翌年(1991年)5月17日～18日には、鴛泊字本泊の砂浜で10羽が観察された。

## アカエリヒレアシシギ

観察される年と全く観察されない年があって、渡来は不定期である。これまで、沿岸に最も多く渡来したのは1987年と1988年でその他は、群から外れたと思われるような単独個体が観察されているだけであるが、海洋上では毎年大きな群が観察される。また、秋にも単独個体の観察がある。

## ツバメチドリ

1989年4月9日に、鴛泊市街地の道路上で1羽が観察された。

## 2. 個体数について

利尻島に渡来するシギ・チドリ類の個体数は、どの種も非常に少ない。一カ所に大きな群となって渡来することはなく、分散しているかのように1～3羽で観察されることが多い。

これまでに一カ所で最大羽数が記録されたのは、チュウシャクシギの17羽で、タカブシギの15羽、トウネンの12羽、セイトカシギの10羽が次ぐ。また、観察例の最も多いキアシシギは、6羽が最高であった。また、島内全域を累積しても、やや増加するものの、一種当たり20羽を越えることはない。

## 3. 渡来地について

湖沼地帯の岸及び湿地だけで観察されたのは、コチドリ、コアオアシシギ、アオアシシギ、クアシギの4種で、海岸域だけで観察されたのは12種あり、最も多かった(Table 1)。どちらでも観察されたのは5種である。海岸域での種数が多いことは、冒頭で述べたように本島には、湿地や干潟的環境が無く、海岸域がその代替地になっていることに因るものと考えられる。しかし、海岸域も海藻が打ち上げられている岸への渡来が多く、岩礁、砂浜では少なくなり、転石浜への渡来は稀になる。

湖沼地帯での観察の多くは、年によって夏期の降雨量が少ない時に湖沼の水位が低くなり、湖岸に干潟的環境が出現した時に限られる。海岸域で観察されることが多いトウネン、メダイチドリが湖沼地帯で観察されるのもこのような時である。1988年には最も低水位となり、早い時期に渡来種数のピークがあった。(Fig 1)。

湿地では、シギ・チドリ類の渡来時期に併せてそれが造られることは少なく、春季は近年特に降雪量が少ないため、渡来時期前に消失してしまうことが多い。この環境地が毎年あった場合、渡来種及び個体数は増加することが伺える。

## 4. 渡来時期について

月別の観察種数では、9月が13種と最も多く、8月12種、5月が11種でそれに次ぎ、4月と10月

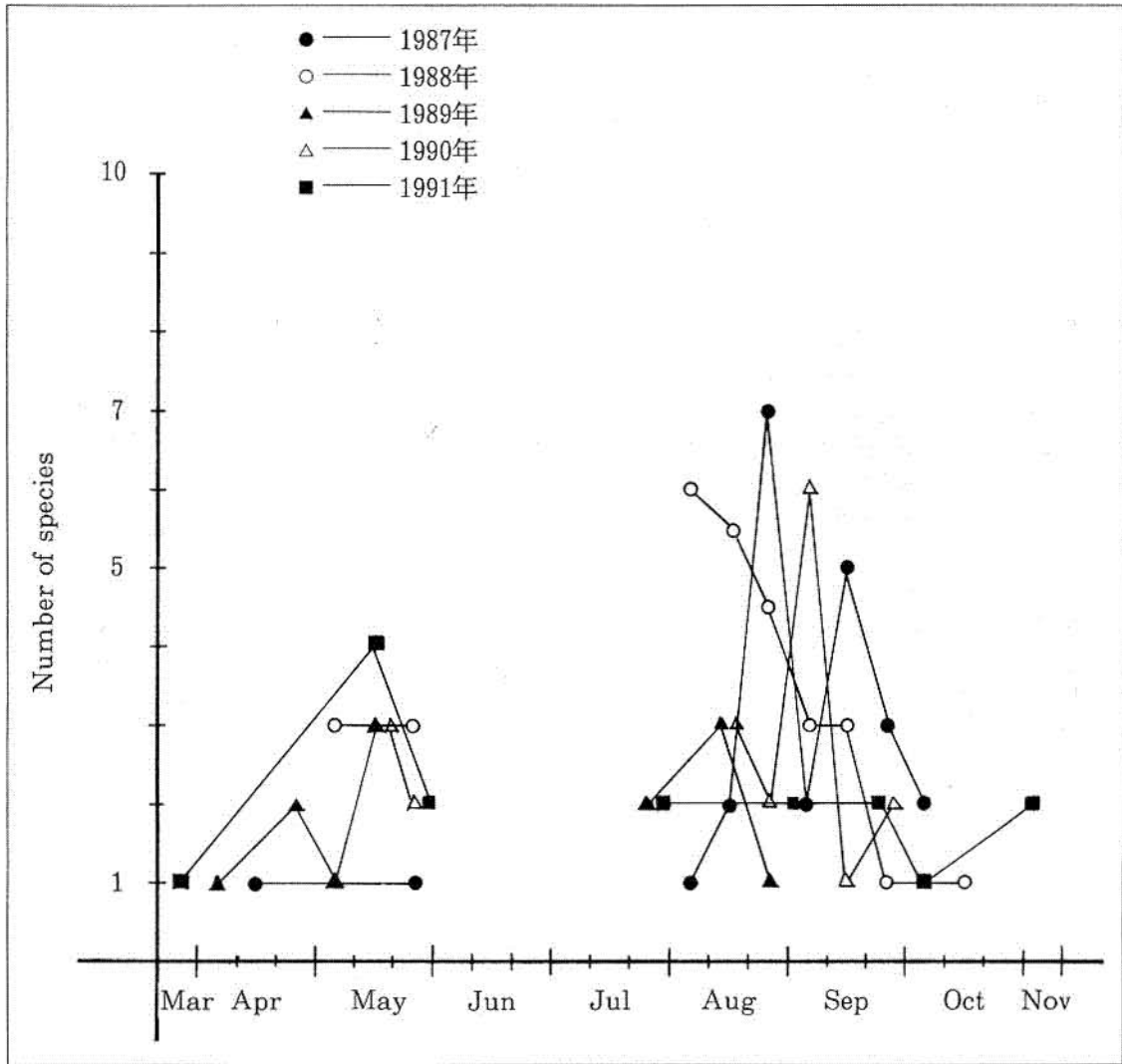


図1. 利尻島におけるシギ・チドリ類の渡来種の季節的変動

Fig 1. Seasonal changes in the number of Waders of the Rishiri Island

が5種で、7月は4種である。3月の1種はタゲリの早い記録であり、11月もタゲリと遅い渡来のタシギによるものである。そして、6月は夏鳥ともいえるイソシギ、オオジシギの記録によるもので、実際の渡来はなく、本島のシギ・チドリ類の渡りは4月～5月と7月～10月にあるといえる。これから、秋期の渡り最盛期は8月下旬から9月上旬で、春期が5月中旬であると推測されるものの、年によって変動があって特定できる結果ではなかった。(Fig 1)。しかし、これらの渡来の傾向は他地域と比較しても、道北の紋別市コムケ湖

・道東の大樹町舟川河口と同様である。(大館1990、飯島1991)。

#### おわりに

利尻島に渡来するシギ・チドリ類は、道内の他地域と比較すると種数及びその渡来数は少なく、定期的に観察される種も少数である。これは、同じ島嶼である天売島でも同様であり(寺沢1986)、これら島嶼への渡来は少ないといえる。さらに、調査精度も大きく関与するが、渡来状況の年変化が大きいことも併せると、本島に渡来する個体は

渡りの主要なグループでは無く、群から離れたものや疲労などで一時的に休息する個体と考えられる。しかし、近年は春の渡り期に記録される種が増加しており、その傾向については今後も継続して調査する必要がある。

#### 引用文献

- 小杉和樹, 1988 : 利尻島の鳥. 利尻町立博物館年報, No.7 : 43-54
- 小杉和樹, 1989 : オタドマリ沼の鳥. 利尻町立博物館年報, No.8 : 47-60
- 小杉和樹, 1990 : 利尻島の海岸部における冬期の鳥類相. 利尻町立博物館年報, No.9 : 50-60
- 大館和広, 1990 : コムケ湖のシギ・チドリ・ワイルドライフ・レポート, No.12 : 35-41
- 飯嶋良朗, 1991 : 北海道大樹町歴舟河口におけるシギ・チドリ類の渡来状況. 帯広百年記念館紀要, No.9 : 1-13
- 寺沢孝毅, 1986 : 天売島の鳥